様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８７０７０７

研究課題名（和文）文化産業のグローバル展開をめぐる研究――フィンランドのマンガ出版を事例として

研究課題名（英文）Globalisation in a cultural industry: a case study of comics circulation in Finland

研究代表者
秦　美香子（Hata, Mikako）

花園大学・文学部・准教授

研究者番号：９０５８５３５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，海外で日本のマンガが受容される様相を，一枚岩的なものとして見るのではなく現地の文化状況との関連に注意しつつ考察することであった．本研究ではとくにフィンランドを対象とし，観察調査およびインタビュー調査を実施し結果を分析した．
分析の結果，フィンランドのマンガ・アニメファンたちは，「クール・ジャパン」政策のイメージする「海外の消費者」像からは遠い様子が見て取れた．本稿が取り上げた事例からは，「日本のマンガ」というナショナルなものが日本の文化産業の資源として国際的競争力を持つというよりも，「マンガ」がナショナルな出自を忘れられて各地に溶け込んでいく様相が見てとれた．

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to examine the specific aspects of Japanese comics (manga) with special attention to their connections to local culture, as well as to consider manga readerships in foreign cultures. This study particularly focuses on the nature of distribution and the reception of manga in Finland.
Based on the research, manga fans in Finland, at least, are a far cry from “overseas consumers” envisioned by Japan. They want to expand the presence of Japanese culture in their own location rather than consume Japan or go to Japan. While it is dangerous to draw any decisive conclusions from the few examples listed in this paper, from the evidence offered in the research, at least, the national phenomenon of Japanese manga does not drive Japan's international competitiveness by providing a usable resource for the tourism and culture industries; rather, it is clear that the national origins of manga are forgotten, and it is instead assimilated into the local culture.

研究分野：メディア研究

キーワード：出版産業のグローバル化　マンガ研究　フィンランド　ファン研究

１．研究開始当初の背景

特に 2000 年代以降、日本政府はマンガ・アニメなど文化産業の海外展開を強く意識するようになった。最も象徴的な例は、2007 年頃から経済産業省などによって主導されている「クール・ジャパン」戦略だろう。「クール・ジャパン」戦略のもとでは、食文化やファッションなど多岐にわたって「日本文化の海外発信」が試みられており、その中核に位置付けられているのがマンガ・アニメである。こうした状況を背景に、日本のマンガ・アニメのグローバル展開を主題とした学術研究も進められるようになった。科学研究費助成事業のなかでも、商学の見地からの研究（松井、2010-2012、「文化製品の国際マーケティング：北米における日本産マンガの普及に関する実証研究」[研究課題番号：22730332])、芸術学の見地からの研究（大城、2009-2011「女性 MANGA 研究:主体性表現の可能性とグローバル化-欧米/日本/アジア」[研究課題番号：21320044]）などが行われている。

日本のマンガ・アニメのグローバル展開をめぐる学術研究には、今後取り組むべき３つの課題がある。

(1)特定地域以外にも目を向けること。日本のマンガ・アニメの「海外」受容を語る際に注目されるのは、主に東～東南アジア、ヨーロッパ、アメリカである。しかし、たとえば「ヨーロッパ」の状況については、フランス、イタリア、ドイツなど、マンガ・アニメを長年に渡って受容してきた国に焦点がおかれ、それらの国の状況が「ヨーロッパ」の状況として説明されることが多い。実際には、北欧・東欧など、ごく最近になって日本マンガ・アニメのファン文化が急激に発展してきた地域では、西欧とは異なった作品が人気を得たり、ファンの集い（コンベンション）のありように相違が見られたりする。国・地域間の差異を検討する視点が必要である。

(2)日本のマンガ・アニメが受容される事象を、相手国・地域の文化状況との関連から把捉すること。日本のマンガ・アニメの発信（コンベンションや日本文化関連イベントの実態調査など）については実証的な研究がいくつか発表されている半面、日本のマンガ・アニメが現地のコミック・映像文化状況とどのように相互作用しながら流通し、受容され、あるいは現地化されているかについては、まだ十分に検討されていない。アジア各国・地域やアメリカについては丁寧な調査・研究が蓄積されつつある（アジア諸国に関しては岩渕編(2011)や白石(2013)、アメリカについては上記の松井(2010-2012)など）。一方、ヨーロッパ諸国・地域についてはさらなる研究が必要である。とくに日本の研究者による研究発信が少ない点が問題である。

(3)マンガ（印刷媒体）とアニメ（映像媒体）を区別して調査研究すること。メディアミックス（様々な媒体で同じ内容の物語を発表・販売する）戦略をとる作品が増え、ひとつの物語が多様な形式で受容されることが近年では当たり前になった。そうした文化産業の動向を把握するためには、媒体特性を前提しない視点も必要ではある。しかし、印刷物であるマンガと映像であるアニメは、それぞれ異なる産業構造の下で生産され流通している。国によって、マンガが多く読まれる、アニメのみが人気など、受容の状況も異なる。個別の特徴に目を向けた研究こそ重要である。

２．研究の目的

グローバル化する日本の文化産業の実相を明らかにするのが本研究の目的である。分析の焦点は、日本のマンガ文化と、それを受容する国のコミック文化との相互作用に置く。日本のマンガのファン文化が近年発達し、また現地のコミック文化も 100 年ほどの蓄積がありながら、これらを対象にした学術研究がいまだほとんど行われていないフィンランドを事例として調査する。調査によって、日本のマンガが単に輸入されるだけでなく、現地の文化状況のなかで浸透し、現地化されていることを分析する。この研究によって、文化産業の「グローバル化」は一枚岩的なものでなく、各ローカル文化の文脈に応じて多様に展開されるものであることが明らかになると考える。

３．研究の方法

本研究の方法は、資料調査、現地での観察およびインタビュー調査である。

資料調査は、ヘルシンキ大学図書館、ヘルシンキ市立図書館、コミックセンター（ヘルシンキ市）、アールト大学図書館にて実施し、フィンランドおよび日本のマンガの配架状況を調査した。あわせて日本のマンガやポピュラー文化に関する研究の調査も実施した。

観察調査は、日本マンガおよびアニメに関するファンの集い（ファン・コンベンション）およびヘルシンキ・コミック・フェスティバルにて実施した。

インタビュー調査は、ファン・コンベンションの主催者を対象に、コンベンション設立の経緯などを尋ねた。また分析の参考として、本研究以前に調査を実施した、マンガ読者を対象に作品受容に関して尋ねるインタビュー調査およびアンケート調査の結果を参照した。インタビュー調査にあたっては事前に研究計画を説明し、調査への協力は自由であり、インタビューの事前・途中・事後のいかなる時点でも協力をやめることができることや、個人情報の取り扱いなどについて説明し、インフォームド・コンセントを得た。得られたデータの分析方法は SCAT（Steps for Coding And Theorization）分析を用いた。

４．研究成果

(1)翻訳出版物の出版および日本マンガスタ

イルの普及

フィンランドでは、マンガは一般の書店、キオスク、コミックショップで販売されている。フィンランドのアーティストが描くマンガは、新聞掲載マンガと私費または少部数出版のオルタナティブ・コミックに大別される。マンガは１万部を超えるとベストセラーといえる規模であるが、後者のオルタナティブ・コミックは発行部数が数千部程度以下であるため、主にコミックショップでのみ販売されている。一般に広く読まれているマンガは Aku Ankka（ドナルド・ダック）のシリーズと、新聞マンガである Fingerpori シリーズなどである（秦、2016）。

こうした現地のマンガ出版状況の中で、日本マンガは少なくとも一定程度は認知されている。日本マンガのフィンランド語版は、Tammi 社のマンガレーベルである Sangatsu Manga から発行されている。Tammi はデンマーク発祥でスウェーデンにて発展し、現在は多国籍企業グループとなった Bonnier group に属する。2013 年に Sangatsu Manga の編集者である Antti Valkama 氏にインタビューした際には、日本のマンガは発行部数が最少で 3､000 部､人気のタイトルで 10､000 部～15､000 部ということであった。国内の人気作品とは同程度の人気があると推測できる。また書店でも日本マンガは販売数が多く、大型書店である Akateeminen Kirjakauppa や Suomalainen Kirjakauppa ではマンガコーナーの 1/3 程度を日本マンガが占めている。なお、フィンランドでは日本マンガを掲載する雑誌は存在せず、単行本が毎月刊行されている。日本や他の国でも人気のタイトルが翻訳される他、とくにフィンランドで人気の『銀牙』シリーズ（高橋よしひろ作）が継続的に刊行されている。

日本マンガの受容は、単に翻訳出版物が消費されるということにとどまらない。日本マンガの描き方を解説した書籍が数多く発行されている点や、現地のマンガの中に日本マンガの様式が取り入れられている点も、広い意味では日本マンガの受容といえるだろう。ここでいう日本マンガの様式とは、ページの半分以上を占めるような大ゴマや、コマ枠が歪んだ変形ゴマの多用、目のみを描くアップのコマ、日本マンガに特有の漫符（不安を感じた際に顔に縦線が描かれるなど）や人物の描き方（デフォルメし、輪郭線を丸く簡略化して描くなど）によるキャラクター描写などを指す。近年、このような日本マンガの様式を取り入れた作品が現地のアーティストによって描かれる例がしばしば見られるようになり、JP Ahonen and KP Alare による作品など、国内だけでなく海外でも読まれるものも徐々に増加している。

なお、フィンランドのマンガアーティストは、フィンランド国内市場は規模が極めて限定されているために、商業的に成功するためにはフランス、ドイツ、イギリスなど他のヨーロッパ地域でも消費される必要がある。したがって、日本マンガの様式が取り入れられるのも、単純に日本マンガがフィンランドのマンガ文化に影響を及ぼしているということではなく、様々な地域の表現技法を取り入れつつフィンランドのマンガ文化が発展してきたことを暗示していると考えた方が妥当であろう。

(2)ファン・コンベンションと日本マンガの受容

次に、日本マンガ・アニメの総合的な受容として、ファン・コンベンションに注目する。日本のポップカルチャーのファンによって開催されるイベントであるファン・コンベンションは、フィンランド内で継続的に開催されている大規模なものに Animecon（Helsinki 市などで開催）、Desucon（Lahti 市で開催）、Tracon（Tampere 市で開催）があり、それぞれ 5、000～10、000 人の来場者がある。それ以外に、同様のコンベンションで小規模に開催されているものも数多い。ファン・コンベンションには、アニメやゲームをメインテーマにしたものが多いが、小規模のコンベンションにはアイドル音楽をテーマにした Aicon など多様なテーマも設定されている。

コンベンションの主な内容は、コスプレを披露しあう大会やゲーム大会、日本から声優やマンガ家などのゲストを招待したトークショー、フィンランド人参加者による研究発表などである。業者によるマンガや関連グッズの物販はあるものの、日本で開催される同様のイベントとは異なり、同人誌やイラストの販売といったことはほとんど行われていない。作品を披露しあう場というよりも、日本マンガ・アニメをテーマに人々が集まってレクリエーションを楽しむという雰囲気が強い。

いずれのイベントも、会場の使用され方はおおむね同様であるため、2016 年 9 月に開催された Tracon を例として挙げる。Tracon は、タンペレ・ホール（Tamere Talo）と、同じ敷地にあるソルサ公園（Sorsapuisto）を全て借り切って行われる。大ホール（Iso Sali）ではトークショーやコスプレ大会が開催され、小ホール（Pieni Sali）ではゲーム音楽にちなんだピアノコンサートなどが開催される。別のホール（Sorsapuistosali）は物販会場として使用され、日本マンガの出版社やマンガ全般を売る出版社の他、日本の商品を売る業者や SF 関連グッズを売る業者がブースを設けていた。ホール以外の会議室では、ゲーム大会や、アニメ作品に関する議論、ゲーム制作や SF、またこの回のメインテーマであったミステリー作品に関する講義や研究発表が行われていた。部屋として区切られていないオープンスペースも活用されており、参加者がコスプレ写真を撮影できるスペース（Cosplay-kuvauspiste & kuvausalue）、別のコンベンションがプロモーションのた

めのブースを設けたギャラリースペース（Taidekuja）などがあった。また会場の外は、インフォメーションやチケットに関するテントが設置され、公園部分では子供向けの体験型イベントなどが開催されていた。

次に、Desucon と Tracon の共通点および類似点に注目しつつ、ファン・コンベンションのあり方について述べたい。Desucon は Animecon への批判的検討から始められたコンベンションであった。Animecon がエンタテインメント指向であるのに対して、もっとアニメやマンガなどについて自由に話し合い、ただ単に遊んで終わるのではないイベントにしたいという思いを共有した 20 歳前後の若者たちが、Lahti 市のシベリウス・ホールを借りて開催しているイベントである。現在では夏と冬の年２回開催されており、毎回会場は同じホールである。会場の収容人数は 5、000 人程度であり、参加者が増加しているため少々手狭ではあるが、これより大きいホールがフィンランド内には数少なく、収容人数が 10、000 人程度になってしまうため、シベリウス・ホールがちょうど良いということであった。また、このホールで毎回開催してきたこと、このホールで年間を通して開催されるイベントのうち最大のイベントが Desucon であり、ホール側からも良い印象を得ていることなどからも、場所を移動したくないということであった。イベントの内容はアカデミックな研究発表が充実している点が特徴的で、会場や近隣で騒いだりする年少の参加者を制限するためにも、近年では 18 歳未満の来場を禁止するようになった。

Tracon にも作品内容について議論しあうイベントも設けられているが、どちらかというと Tracon はよりファミリー指向である。コアなファンでなくとも楽しめるよう、子供たちがゲームのキャラクターになりきってバトルを楽しむイベントなどが開催されている。会場は Tampere 市のタンペレ・ホールを使用しており、こちらも毎回会場は同じ場所である。Tracon は Tampere 市にあるコミック・ソサイエティが始めたコンベンションであるため、Tampere 市から場所を変えることはない、と主催者の方からうかがった。また Tracon も、タンペレ・ホールで開催されるイベントの中で最大のものであるということであった。

Desucon も Tracon も、主催者は主に高校生・大学生であり、大学を卒業すると通常はスタッフから引退し、後輩に引き継がれているようである。また、開催場所のホールが固定しており、ホールに愛着を持っている点も共通している。いずれの主催者に行った聞き取り調査からも、主催者は、それぞれのイベント自体、会場自体に強い思い入れを持っており、若い世代が大規模なイベントを継続的に成功させていることに誇りを持っている様子が見て取れた。コンベンションのテーマは日本のアニメやゲーム、マンガに関わるが、少なくとも主催者の意識は日本文化や作品そのものよりも、イベント自体を志向しているようであった。

なお、主催者たちのこうした意識のあり方は、フィンランド国内の日本語教育の現状にも関係がある可能性がある。

日本語学習に関心を持った若者は、高校や大学の選択科目で日本語を履修することができる。聞き取り調査によれば、高校の日本語クラスは第３言語（必修科目である英語・スウェーデン語／フィンランド語以外の語学系選択科目）の中でドイツ語と並び最も人気の高い言語であり、大学でも日本語クラスは人気が高いということであった。これまでは単位認定のされないオプショナルな科目であったものの、2016 年夏からは、日本語・中国語（北京語）・アラビア語は正規の選択科目として認可された。しかし大学では、学生の学習熱の高さに反して、日本語を学習できる機会自体が近年減少している。

高等教育機関で日本語学習が削減される第１の理由は、日本語学習に関する資金源の確保が困難なためである。同じ東アジアの言語でも、中国語コースは中国政府から潤沢な助成金が出されているため、学生からのニーズに関わらず拡大している。そうした資金源のない日本語クラスはカリキュラム再編が進められており、日本語を上級まで学ぶことが出来るのは現在ではヘルシンキ大学のみとなった。

第２の理由として考えられるのは、日本語の「使い道」の無さである。上述した研究の調査協力者で日本語を勉強している者は、日本語のリテラシーが趣味的には役に立っても、フィンランド国内で働く上で仕事に使える訳ではないため、日本語は実用性が低いと考えていた。

以上の通り、フィンランド国内では、特に若者世代が日本に対する高い関心を持っている半面、日本語を学ぶ機会は多くないというのが現状である。そのため、たとえマンガファンが作品を通して日本での留学や就職を夢見たとしても、そのような進路につながる教育制度が整っていないため、留学などの行動につながっていないことが推測できる。

(3)考察

以上、翻訳出版物の発行という点では、日本マンガは比較的人気が高いことを述べた。また、日本マンガの展開は翻訳出版物が発行される部分のみにではなく、現地のアーティストが描く作品の中に様式が取り込まれているという部分にも見ることが出来ることを指摘した。次にファン・コンベンションの事例からは、コンベンションの主催者たちが、イベントを開催すること自体に重点を置いており、コンベンションの内容も主催者の意識も、必ずしも日本理解や日本関連商品の消費に向かっているわけではないことを浮かび上がらせた。

以上から見えてくるのは、「クール・ジャパン」が意識する、「目的地としての日本」「目的としての日本」が、少なくともフィンランドの日本マンガ受容には明確には存在していないということである。翻訳出版物の人気は一定程度あるものの、Aku Ankka のような巨大なコンテンツに対抗できるほどではない。日本マンガの様式が作品に取り入れられていても、指向される市場はヨーロッパの他地域であり、日本で作品を発表したい、日本の読者に読んでほしい、といった動機は少なくとも現時点ではアーティストたちにない。日本マンガを愛好する読者も、日本に対する関心を一定程度は深めているが、学習の場が限られているため日本語を学ぶことが必ずしも容易ではない。そうした状況も手伝い、少なくとも現在では、マンガ読書経験をもとに日本に旅行に出かける、といった形での消費は一般的ではない。フィンランドで精力的にコンベンションを開催する若者たちも、コンベンションの中で日本の製品を販売することや、例えばコンベンションを通して日本への観光ツアーを開催するなどといったことは現時点では目指されておらず、それよりも、各開催地でのイベントを継続するという、より地元指向的な態度が見られる。
以上から判断する限りでは、少なくともフィンランドのマンガ・アニメファンたちは、「クール・ジャパン」政策のイメージする「海外の消費者」像からは遠い。かれらは「日本」のように描くこと、「日本」を消費すること、「日本」に行くことを目指すのではなく、自分たちの場所でマンガ文化を展開していく指向を持っている。本稿が取り上げた少数の事例から結論を下すことは危険ではあるものの、少なくとも本稿が取り上げた事例からは、「日本のマンガ」というナショナルなものが観光資源／日本の文化産業の資源として国際的競争力を持つというよりも、「マンガ」がナショナルな出自を忘れられて各地に溶け込んでいく様相が見てとれる。

〈引用文献〉
岩渕功一編、2010、『対話としてのテレビ文化：日・韓・中を架橋する』ミネルヴァ書房
白石さや、2013、『グローバル化した日本のマンガとアニメ』学術出版会

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①秦 美香子、フィンランドにおける日本マンガの受容、人間学研究、査読有、15 号、2016、1-11
②秦 美香子、北欧のマンガ文化およびマンガ研究の概要――フィンランドを中心に、花園大学文学部研究紀要、査読無、48 号、2016、1-25

〔学会発表〕（計　5　件）
①秦 美香子、フィンランドのマンガ読者に関する調査、中部人間学会第 16 回大会、2016 年 11 月
②秦 美香子、An Analysis of the Moomin Characters in the comics strips and the TV animated series, Taiwan Children's Literature Research Association、2016 年 11 月
③Mikako Hata、An Example of Manga Fandom in Finland, Mechademia Conference on Asian Popular Cultures、2016 年 3 月
④秦 美香子、日本マンガを受容した経験とその記憶：フィンランドの「銀牙――流れ星銀」ファンに対する調査結果から、日本マンガ学会第 15 回大会、2015 年 6 月
⑤Mikako Hata、Finland as Moominvalley: National Image Constructed in Transnational Memory, 10th Crossroads Conference in Cultural Studies、2014 年 7 月

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
秦　美香子（HATA, Mikako）
花園大学・文学部・准教授
研究者番号：９０５８５３５８

(2)研究協力者
布施　倫英（FUSE, Rie）
Japanese language staff
Department of World Cultures
(East Asian Studies)
University of Helsinki, Finland.